

自己調整学習を目指した児童と教師でデザインする体育授業
～ 児童と教師が共同的にルーブリックを作成した跳び箱運動の実践を通して ～

加茂市立石川小学校

笹川 歩希 (平成 30 年度)

【主張】

これまでの私の体育授業では、教師が考える課題に応じた場や技のポイントを提示し、その提示された場や技のポイントに沿って児童が場を選択し、技能向上を目指してきた。しかし、すべての児童の課題に対応することは難しく、教師と児童に目指す姿のずれがあることに気付いた。本研究では、教師と児童のずれをなくすために、共同的にルーブリック（評価基準）を作成した。その過程で、児童一人一人が自分の課題に応じて解決する方法を考え、工夫し、試し、評価することで、めあてに向かって学び続ける（自己調整する）児童を育成したいと考えた。

1 研究主題設定の理由

これまでの私の体育授業では、教師が課題解決のための段階的な場と評価基準を設定し、児童が場を選び、試技を繰り返すことで、技能及び意欲の向上を目指してきた。結果、ある程度の技能レベルの児童には技能の向上及び意欲が高まり、手立ては有効であったと考える。しかし、段階的に設定したそれぞれの場の評価の観点の意味が児童の中で動きとして理解しきれず、教師と児童の目指す姿にずれが生じることがあった。また、一人一人の困り感への考慮がなく、次の段階になかなか進めない児童もいたため、全員にとって個別最適な学びとはなっていなかった。

そこで、まずは明確な視点が示された評価基準があると良いと考えた。その指標として、学習の達成度を段階的に評価する「ルーブリック評価」を使用した。三宅(2017)は、「教師と児童が共同的にルーブリックを作成することは、児童の自己学習への動機付けができる」と述べている。また、岩本(2021)は、共同的にルーブリックを作成することについて、「生徒と作成したルーブリックで自己評価を行うことは、教員の評価とのずれが少なくなり、自己評価力が高まる」と報告している。本研究ではそのルーブリックを使用し、児童と教師で共同的に作成することにした。

個別最適な学びは、「児童が自己調整しながら学習を進めていくことができるように指導することが重要である」(文科省, 2021)。ここでいう自己調整とは、「目標を達成するために、自分の学習に対する意欲や学習方法を自ら観察、調整し、効果的に学習を進めていく姿」である(伊藤, 2012)。私は、体育科において「自己調整しながら学習を進めていく児童」とは、「自分の課題に応じて解決の方法を考え、工夫し、試し、評価する児童」と捉える。児童が自己調整をする姿を目指し、本研究で使用するルーブリックは、体育の特性を考慮し、「動きが分かる絵と言葉による技能ポイントの説明」とする。また、「共同的にルーブリックを作成する」とは、「教師が基盤となるルーブリックを設定し、児童の意見を加えながら共同で作成するもの」とする。技を試し、児童と教師や児童同士で対話をする中でルーブリックを改善していくことで、児童が評価の観点の意味を理解し、自分たちの課題に応じたルーブリックになる。そして、共同的にルーブリックを作成することそのものが自己調整になると考える。そのルーブリックを基に、試技や相互評価を行い、児童の気持ちの変容や課題解決に向けて考える姿からその有効性を検証したいと考えた。

【研究仮説】

跳び箱運動において、児童と教師が共同的にルーブリックを作成することにより、めあてに向かって学び続ける自己調整をする姿が増えるだろう。

本研究における定義

自己調整：自分の課題に応じて解決の方法を考え、工夫し、試し、評価する児童

ルーブリック：動きが分かる絵と言葉による技能ポイントの説明

共同的ルーブリック：教師が基盤となるルーブリックを設定し、児童の意見を加えながら共同で作成するもの

2 研究の内容

授業実践（1年次）について（令和5年1月19日～2月1日）

- 対象：第5学年56名（男子31名，女子25名）
- 単元：器械運動 跳び箱運動 切り返し技（かかえこみ跳び・開脚跳び・大きな開脚跳び）
- 概要：ループリックを初めて扱ったため，教師が基盤となるループリックを提示後，場と評価ポイントの内容を全員で確認をしながら，ループリック作りを学び，試技や相互評価を行った。
- 成果：児童と確認をしながらループリックを作成したことにより，児童が技のポイントを理解し，教師と児童の目指す姿の共通理解が図れ，主体的に学習に取り組む姿が多く見られた。
- 課題：ループリック作成の経験がなく，児童一人一人の困り感を拾いきれなかったため，全員にとって困り感を解決するループリックにはならず，次のレベルに進めない児童もいた。

(1) 授業実践（2年次）について（令和5年6月12日～7月6日）

○1年次からの変更点

教師が基盤となるループリックを提示後，一人一人が自分の課題を確認し，解決方法を考え，工夫し，児童と教師で共同的にループリックを作成する。また，技を試し，対話をする中でループリックを改善していく。

○対象：第6学年56名（男子31名，女子25名）

○単元：器械運動 跳び箱運動 切り返し技（かかえこみ跳び） 回転技（台上前転・伸膝台上前転）

○単元計画

時間	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目	9時間目	10時間目
主な内容	学習計画作成 個々の課題共有	ループリック作成	かかえこみ跳び ループリックを基に試技・相互評価			個々の課題共有	ループリック作成	台上前転・伸膝台上前転 ループリックを基に試技・相互評価		

(2) 検証方法について

分析項目	抽出児の単元前までの様子
①診断的・総括的評価による意欲の変容についての分析	A児…かかえこみ跳び，台上前転のどちらの技も達成することができていなかった児童
②ループリックによる技能の変容についての分析	
③映像や振り返りによる思考内容についての分析	B児…台上前転は達成できていたが，かかえこみ跳びは達成することができていなかった児童

抽出児の動きと全体の数値の変化から①，②，③を分析し，自己調整する姿が増えたかを検証する。

(3) 研究の実際

○ループリック作成

教師が基盤となるループリックの提示後，児童が個々の課題別に場の工夫を考えた（図1）。技を試し，対話を繰り返す中で，着手の位置にテープを貼ったり，跳び箱の脇にセーフティマットを置いたりするなどの場の工夫をし，課題解決のためのループリックを作成した。A児は，高さへの恐怖心があり強く踏み切ることが難しかったため，台上前転のレベル2のステージに跳び乗る場に挑戦していた。ループリックを作成する中で，踏み切り板の下に台を入れ，跳ぶ高さを低くして跳び乗ったら，より段階的に解決ができると気づき，試技を繰り返していた。その後，グループ内でも対話が行われ，ステージに真っすぐに回る目印となるテープも設置した（図2）。結果，A児は自信をもって強く踏み切ることができるようになり，台上前転の達成目前というところまで技能の向上が見られた。また，この間，教師は，課題に合った場の工夫にしてもらうために，「膝ギョッ」などの部位+オノマトペの動作局面別の動きのコツを示した。他には，児童が場の工夫を考えている際，



図1 場の工夫をする児童たちの様子

結果，A児は自信をもって強く踏み切ることができるようになり，台上前転の達成目前というところまで技能の向上が見られた。また，この間，教師は，課題に合った場の工夫にしてもらうために，「膝ギョッ」などの部位+オノマトペの動作局面別の動きのコツを示した。他には，児童が場の工夫を考えている際，

課題に合った場になっているか、工夫の意図等について問い、場合によっては軌道修正のための声掛けをした(図3)。

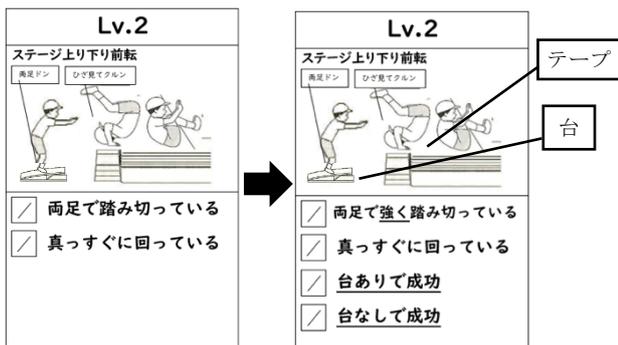


図2 教師が提示したループブリックとA児のグループで作られたループブリック(下線部は付け加えられた箇所)

C1: 着地の時に足が開かないようにするために、マットにケンステップを置いたらどうか。
 C2: 前も(開脚跳びやかかえこみ跳び)置いたことあるしね、いいかも。
 C2: (C1の試技を見て)ケンステップには近いけど、まだ足は開いているな。
 T: じゃあ、さっき回った動画をもう一度見て、踏み切り・回転・着地のどこから足が開いているか見てみようよ。
 C1: (動画を見て)え、踏み切りの時にもう足開いてない?
 C2: 確かに。じゃあ、足を閉じて踏み切りができるように、ロイター板にもケンステップを置いてみようよ。

図3 軌道修正を図った教師の声掛け(下線部)

○ループブリックを基に行った試技と相互評価

児童と教師で共同的に作成したループブリックを基に、児童は選択した場で課題解決に向けて試技を繰り返した。その際、ペアで到達ポイントの達成度について評価を行った。ループブリックと照らし合わせながら、できている箇所のチェック、できていない箇所はどうすればできるようになるかについて対話をし、試技を重ねた。必要に応じて、タブレット端末による動画撮影・再生機能を利用し、動画を見ながら対話をした。B児は、レベル4の跳び箱を横にしたかかえこみ跳びの場に挑戦し、跳び越した後まで頭が突っ込んでしまうことで着地がうまく決まらなかった。そこで、作ったループブリックと自分の試技動画を見比べたり、友達や教師からの評価を聞いたりした。すると、着地時に、顔が下を向いていたことに気付き、改善が図られた。その後、評価の観点を1つ1つクリアするために、友達との相互評価を重ね、かかえこみ跳び、伸膝台上前転、首はね跳びの達成につながった。

3 授業実践の結果と考察

(1) 診断的・総括的評価から見た意欲の変容

表1 診断的・総括的評価で肯定的評価をした児童の結果

質問項目	実践①単元前	実践②単元後
4 体育では、自分の能力に合った運動の練習ができます。	58%(32人)	77%(43人)
10 1つ運動ができると、もう少し難しい運動に挑戦しようという気持ちになります。	69%(38人)	89%(50人)
11 体育では、自分のめあてを持って学習します。	75%(41人)	94%(52人)
12 どうしたら運動がうまくできるかを考えながら学習しています。	73%(40人)	89%(50人)

単元前後の診断的・総括的評価の結果である(表1)。児童と教師で共同的にループブリックを作成し、改善することで、めあてが明確になり、自分の能力に合った運動ができる、1つの運動ができるともう少し難しい運動に挑戦しようという実感につながったと考える。また、そうしてできたループブリックが児童の課題に合ったことで、どうすればできるようになるかを考える児童が増えたと推察できる。

(2) ループブリックのレベルの高まりから見た技能の変容

表2 単元始めと終わりのループブリックのレベルの人数の変化

技	時間	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
かかえこみ跳び	3時始	14%(8人)	23%(13人)	36%(20人)	13%(7人)	14%(8人)
	5時終	1%(1人)	1%(1人)	21%(11人)	27%(15人)	50%(28人)
台上前転・伸膝台上前転	8時始	12%(7人)	1%(1人)	33%(18人)	9%(5人)	45%(25人)
	10時終	1%(1人)	8%(4人)	5%(3人)	5%(3人)	81%(45人)

単元始めと終わりに児童が挑戦していたループブリックのレベルである(表2)。単元始めと終わりで比較し、かかえこみ跳び、台上前転・伸膝台上前転において上記のようなレベルの高まりが見られた。

以上の結果から、児童と教師で共同的に作成したループリックを基に、自分の動きとループリックを照らし合わせて評価することを繰り返すことで、個々の技能が高まったと言える。

(3) 共同的に作成したループリックを活用し、自己調整をした児童の様子

① ループリックを自らアレンジすることで自己調整をする姿が見られたA児の様子

A児は、単元終了後、場がクリアできたことによる達成感を感じていた(図4)。台を自ら入れたことで、高さによる恐怖心を減らし、強く踏み切ることができるようになった。与えられた場から児童の工夫でループリックを作成したことで、低位の児童にも向上心が芽生え、新たな課題を見つけて挑戦する自己調整する姿が見られた。

台上前転の台ありのやつや、ステージ上リトリのやつで前よりも心みきるのが強くなりたい。あさもなくなつてよかった。まだ未じやくなので、これからも系東習したい。

図4 A児の単元終了後の振り返りの記述

② 共同的に作成したループリックをもとに相互評価することの大切さに気付いたB児の様子

B児は、単元終了後、ループリックをよく見ることで、「何が大切なのか」という自己の課題に気付いた(図5)。何が大切だと分かったのかをB児に問いかけたところ、かかえこみ跳びでは、「着地時に顔を上げること」、伸膝台上前転では、「最初から最後まで膝を伸ばして回ること」と答えた。続けて、「自分ではできているか分からなかったから、友達に見てもらえて良かった」と話した。共同的に作成したループリックをもとに、相互評価をしたことで、評価の観点を理解し、技能を向上させようと自己調整する姿が見られた。

ぼくは、昨年がかかえこみとびやしくしつ台の上前転ができたから、たけとループリックをよく見ることで、何が大切なのか分かり、できるようにになりました。さらに最後、首はねとびができるようになってとてもうれしかったです。中学生になっても習ったことを、あきれないようにしたいです。

図5 B児の単元終了後の振り返りの記述

4 研究の成果

- ・児童と教師で共同的にループリックを作成することで、児童たちが意図をもって場の工夫を行い、技ができるようになるための理解が深まり、自己の課題達成のために何を行えば良いかを理解し、見通しをもって学習に取り組む児童が増えた。
- ・課題解決のための方法を考え、試技を繰り返したことにより、技能が向上し、与えられた課題だけでなく、さらに、どうしたら上達するかを自分たちで考え、運動する楽しさを味わった児童が増えた。

5 今後の課題

- ・課題解決のための方法を考え、試技を繰り返している際、担任二人で声掛け及び巡視をしていたが、場が多くできてしまったために、一部見切れないところがあり、声掛けが十分にできない場面があった。
- ・運動が好きな児童もそうでない児童も、どうすれば運動が上達するかを考え、実践する姿は生涯にわたって運動に親しもうとする素地となるため、今後も生涯体育につながる指導の在り方を研究したい。

<引用・参考文献>

- (1) 三宅貴久子(2017)「教師と児童の共同によるループリック作成の意味-第4学年児童のイメージマップ分析から-」『日本教育工学会論文誌』
- (2) 岩本裕樹(2021)「ループリックの効果的な使い方の検討」『第32回英検助成研究』
- (3) 文部科学省初等中等教育局教育課程課(2021)「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」文部科学省
- (4) 伊藤崇達『自己調整学習-理論と実践の新たな展開へ-』北大路書房,2012
- (5) 高橋建夫『体育授業を観察評価する 授業改善のためのオーセンティック・アセスメント』明和出版,2003